

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2018-03-01

特集 夜の景観

目次

P1

■巻頭

「光と景観」 / (文) 近田 玲子
(写真) 茂手木 秀行

P2 ~ 3

■TDA NEWS

<景観アドバイザー養成講座>

「景観アドバイザー養成講座について」
/ 倉田 直道

「長野建築士会景観アドバイザー養成講座 開催報告」
/ 倉澤 聡

■ランドスケープ事情

「都市のリビング・南池袋公園」
/ 富田 泰行

P4 ~ 5

■特集：夜の景観

「光イベントの役割」 / 山下 裕子
「あかりからの景観整備」

/ 角館 まさひで

「LEDが照明器具光源の主流になって」
/ 稲葉 裕

P6

■シリーズ：地域から

「北本市」その1 / 岡野 高志

■景観ビジネス最前線

/ SD Lighting (株)

■ホワイトボード



金沢・浅野川にかかる梅の橋 (Photo: 茂手木 秀行)

光と景観

省エネ効果の高いLEDが手に入りやすくなり、市民生活をより豊かにすることを目標に掲げて、多くの自治体で「夜間景観計画」が実施され始めている。筆者が関わっている自治体でも、歴史的街並みに光を当てて「街の誇り」となる夜景観を作れることを予算計上するなど、光と景観の関係を考えたまちづくりが進められている。わが街を熱く語る自治体の担当者、まちづくりで意見番の景観審議会の委員の方々と共に様々な観点からの検討を加え、地域特性に合わせた夜の景観を一つ一つ実現していくのは、照明デザイナー冥利に尽きる。

LED時代の到来とともに、光を使ったイベントが増えてきた。ライトアップ、プロジェクション・マッピング、イルミネーション―「インスタ映え」する夜景がもてはやされるのは、今や世界的流れと言えよう。華やかで心躍る光は、街の活性化を図り観光客を呼び込むなど、まちおこしに大きな役割を果たしてきた一方で、生活空間とは無縁の光が氾濫する景観を許し、光と景観の基本的な考え方を揺るがす事態も招いている。こうした光は、企画者+光のコントロール技術に長じたシステム・エンジニア+照明器具メーカーによって作られ、自治体の担当者や商店街の人たちが企画した内容を大手の照明メーカーがまとめることが多いが、目先の「インスタ映え」から脱却し、都市的視野を持って景観に取り込む姿勢が求められる。

照明デザインの世界もまた、新しい時代を迎えている。長い間「強電」の範疇であった照明が、今やコントロール機能を扱う「弱電」抜きには成り立たなくなってきた。たとえメーカーが別々な屋外照明器具を使っても、一つの地域で照明の明るさを同時刻に80%に減光するなど、統一した考え方の下で景観を考えることができるようになってきた。照明デザイナーとシステム・エンジニアとの協働の時代が始まっている。 TDA 正会員/近田玲子デザイン事務所 近田 玲子

1 景観アドバイザー養成講座について



倉田 直道
TDA 代表理事
／工学院大学名誉教授

2004年に景観法が制定されてから10余年を経過し、2017年3月31日時点で698団体が景観行政団体（都道府県45、政令市20、中核市48、その他市町村585）となり、うち538団体が景観法に基づく景観計画を策定している。また多くの景観行政団体は、条例に基づく景観審議会を設置したり、景観に関する事前協議や行為の届け出制度を導入して、良好な景観形成に向けた誘導を行っている。こうした景観審議会や景観事前協議には建築や環境関連分野の専門家や学識経験者が委員やアドバイザーというかたちで参加し、行政による景観まちづくりの取り組みを支援している。これに加えて、大規模な開発プロジェクトなどに、景観や都市デザインの専門家がデザイン調整やアドバイザーという役割に関わることも増えてきている。ただ、こうした専門家や学識経験者の参画は、一部の地方都市を除き、大都市圏や地方の中核都市に限られており、多くの地方都市では、景観計画を策定しただけで、景観についての十分な知識や経験を有しない行政職員に限られたリソースの中でその運用を行っているのが現状である。

そうした状況の中で、景観法に定める景観整備機構でもある長野県建築士会から景観アドバイザーの養成に関する相談を

受け、1クール4回、計3クール12回の景観アドバイザー養成講座を開催することになった。また12回の講義を受講した受講者に対して長野県建築士会では認定書を授与することになっている。1回の講義では一つのテーマに関して90分の講義を2回（理論編、実践編）、計180分行っている。現在行っている長野県建築士会による景観アドバイザー養成講座では、「景観・景観デザインとは」「建築でつくる街並み」「ランドスケープと街の風景」「環境色彩とは/環境色彩計画」「景観法/景観計画と景観事前協議」「歴史的街並みと景観」「屋外広告物と景観」「景観事前協議と景観アドバイザー」「住宅地開発と景観」「都市再開発と景観アドバイザー」「景観から都市デザインへ」「景観デザインの展望」などのテーマを予定しており、景観デザイン支援機構（TDA）のメンバーを中心にそれぞれのテーマの専門家が講師を務めることになっている。

現在、景観法に基づく景観整備機構に認定されている法人はのべ99法人（14都道県、55市区町村）であるが、景観まちづくりの支援組織として十分に役割を果たしているとは言い難いのが現状である。景観デザイン支援機構（TDA）では、活動の柱の一つとして、こうした地方における行政の景観行政担当者、景観支援組織や景観アドバイザー等の専門家人材育成のために、景観アドバイザー養成講座、景観に関する出前講座のプログラムを積極的に提供し、支援していく予定である。

ランドスケープ事情

都市のリビング・南池袋公園



南池袋公園のアイコン的なさくらんぼ照明。既存樹である桜に樹形とメンテナンスに配慮して配灯。



木製のサクラテラスは芝生広場に面して段状に連なるベンチがあり柔らかい間接の光が人々を誘う。

昼夜を問わずたくさんの方が訪れるこの公園はまさに都市のリビングである。うららかな日差しの中芝生でゴロ寝をしたり、テラスやカフェで談笑したり、読書にふけったりといったように様々なアクティビティを楽しんでいる。日が西に傾く頃になってもひとけがなくなることはない。むしろ夜の時間を楽しみに訪れる人も多いのだ。

戦後間もなく戦災復興土地地区画整理事業により整備された当公園はその後の財政難と管理不足から老朽化が進み、やがて都会の公園に散見されるホームレスのメッカとなり一般市民の足が遠のくようになっていた。10年ほど前に整備計画が持ち上がり、大震災を契機とした都市防災の意識や国際アートカルチャ構想から都市空間の新たな場づくりが模索されていた。他方、池袋を核とした豊島区は国内有数の高密度都市でありながら消滅可能性都市に指定された経緯もあり、この逆境をバネに都市文化政策を推進する機運が高まりつつあった。折しも公共空間を都市の舞台と位置づけ、「誰もが主役になれるまちづくり」が進められていたことも計画には追い風となった。かつての公園を知る人なら再整備された姿に驚くことだろう。駅から5分程度の交通至便の地でありながらその環境は良好とは言えなかった。歓楽街に接した周辺の路地辺りは薄暗く人目を避けて訪れる人や夜になれば公園自体に足を踏み入れるのもはばかれるほど不安な印象があった。

公園計画はランドスケープデザイナーのリーダーシップのもと、1期と2期に工期を分

2

長野県建築士会景観アドバイザー養成講座 開催報告



倉澤 聡

TDA 正会員 / 都市計画家

長野県建築士会景観アドバイザー養成講座は2017年12月に始まり2019年2月まで全12回の連続講座が予定され松本で開催されている。受講生は長野県内の建築士の方々の45人、一般参加は私も含めて2名、行政関係では長野県の方2名、松本市の方2名が参加している。

●なぜ景観アドバイザーが求められるか

長野県建築士会がこの講座を立ち上げた背景としては、景観行政や地域の景観形成を支援する機会が増えており、持続可能な都市・地域としてより良い景観を創造するためには、景観形成の背景にある人の営み等関係する様々な要因を包括的に捉えることができる「町医者」的な役割を果たせる建築家が求められているという状況がある。



これまでの3回の講座の内容を簡単に紹介したい。

●都市デザインと景観形成

第1回目は昨年12月。全講座のコーディネーターを務める倉田直道講師によっ

て「景観デザインとは」をテーマに、戦前の都市美運動から最近の都市デザインの動向など景観デザインの系譜を踏まえながら講義が進められた。講師の師でもあったアラン・ジェイコブスの「都市デザインとは都市環境を公共的な視点から形体、視覚的に統合すること」といったいくつかの都市デザインの定義に触れながら、各地で行われてきた都市デザインの取り組みや経験について紹介された。**健全な景観形成を進めるためには、「都市環境を総合的に考える」ことの大切さが説明された。**また、景観アドバイザーは、都市環境を総合的に扱う必要があることから、様々な関係者や分野や部門を橋渡しする調整力も必要であり、都市デザイナーでもあるという自覚が必要であることが示された。

●幕張ベイタウンから学ぶ

1月の第2回目は、曾根幸一講師による「景観デザインと幕張ベイタウン」をテーマとした講義が行われた。街区と建物の建て方の関係性について大きく分けて2つのタイプ、「街路に対してファサードを表にし、中庭を建物で囲むヨーロッパなどに良く見られる配置の仕方」と「日本の上級武家地のような庭や塀が街路に接し、家屋が敷地内部に配置されるタイプ」があることが説明された。現代の戸建てにおいても住宅を囲む庭や空地は狭いがパターンとしてはほとんど日本の住宅は後者のパターンが踏襲された。また、集合住宅ではヨーロッパなどにおいて近代化の中で並行配置が良しとされ、その思想が昭和30年代に日本

に移入されたまま現在でも公共住宅の多くが未だその規格のままであるとの問題提起がなされた。

このような流れに対して、幕張ベイタウンでの中庭型での集合住宅街区を創ろうという挑戦、17年という現代では非常に長い開発の中で、ステークホルダーや関係者の調整役としてのマスターアーキテクトの役割や経験談、新しいまちをつくるためのデザインガイドライン作成での苦労等示唆に富むお話をいただいた。

景観アドバイザーにとって、調整能力を鍛え、調整できる環境自体を整えることの重要性や、現在のまちづくりにおいて「まち使い」や「まち営み」という視点が重要になっているとの指摘があった。

●微気候と景観

2月の第3回講座における井上洋司講師のレクチャーでは「微気候と景観」をテーマに、景観の背景にある地形、気象、微気候、本来の植生、歴史、人の営みなど景観の構造を出来る限り把握した上で、ランドスケープや景観を考えることの重要性を中心に教えていただいた。人間が心地よく感じる空間デザインにとって視覚だけではなく、微気候を生み出すという視点からの植栽のデザインの重要性について事例をもとに解説いただいたことが印象深かった。

今後の講座でも、「色彩と都市デザイン」など景観にかかわりの深いTDAの専門家達による講義が予定されており、個人的にも楽しみにしている。

トミタ・ライティングデザイン・オフィス代表 / 照明デザイナー 富田 泰行

施主：豊島区
総合プロデュース・公園設計：ランドスケープ・プラス
照明デザイン：トミタ・ライティングデザイン・オフィス
複合施設建築設計：久間建築設計事務所



南端には丁寧に研ぎ出された人造大理石のリボンスライダーがあり夕刻から光を受けて浮かび上がる。



中央の芝生広場には夜もたくさんの方が訪れる。カフェでランタンを借り食事を楽しむことも可能だ。

けて進められた。公園自体の設計に入る前、池袋駅周辺における3つの公園と街路の環境整備方針を立案し、その中で光環境の全体方針も位置づけることができた。よって当公園は単発の整備ではなく、池袋の今後を見据えた全体計画に基づく先導的なプロジェクトとなった。

公園デザインの大きな特徴は中央の芝生広場である。その広場を囲むように北側にサクラテラスとカフェレストラン、南側にはリボンスライダーが特徴的なキッズテラスがある。芝生広場には照明を一切置かず、周囲のテラスや園路の明るさを頼りに安心を担保しているのが光環境のポイントになっている。暗くても平坦で見通しが効けば安心は得られることから照明なしが実現した。実際に暗さを楽しみに来ている人が多いのにも驚いた。もちろんカフェでランタンを借り芝生で食事をする人たちもいて過ごし方はそれぞれである。カフェから漏れる窓明りはさながら公園の行灯として、テラスのさくらんぼ照明は公園のアイコン的な存在である。リボンスライダーの光は安全の明るさを確保するとともに暗い芝生越しのアイストップとなり夜間景観として公園の奥を引き締めている。

この公園では初期段階から維持継続のための都市経営の視点が重要視されてきた。今後も官民一体となった運営の工夫が継続され、成熟社会にふさわしい公共財の活用につながっていくことが多いに期待されている。

夜の景観

景観は、見える事からはじまるといえます。その意味では「光」無くして景観なしです。昼の光は太陽光ですが、夜の闇を人の活動にふさわしくしてきたのが「灯り」でした。「灯り」は長い間、火に頼ってきましたが、19世紀末からは「電気の灯り」、電灯の時代になり、その光源は「火」から電球の点光源をへて蛍光灯のくまなく明るくする時代になりました。さらに光にエネルギーを集約できるLEDの時代が変わろうとしています。

これは夜の景観の大きな曲がり角、正に夜の景観づくりのきわめて重要な時点が到来していると思います。

拙紙、景観文化は10年目40号の節目にあたり、「夜の景観」を考えてみたいと思います。

1

光イベントの役割

ポテンシャルをあげる「東京ミチテラス」
山下 裕子



Y2 Lighting Design 代表/照明デザイナー
/日本国際照明デザイナーズ協会理事/照明学会会員

近年、暦の節目や様々な場の物語をコンセプトにして活気と高揚をもたらす光のイベントが多くなっています。その表現はクリスマスツリーに代表されるストリングスLED装飾照明から、建築のライトアップ、プロジェクションマッピングに代表される映像投影や、インタラクティブな体感型のものなどを組み合わせて沢山の集客手段になっています。

何故、人を呼びたいのか。一言では経済効果となるわけですが、それががもたらすものは？ 豊かで魅力的な「我が街」を作り出したいからではないでしょうか。

ここでの「我が街」は故郷や住環境ではなく働く人が長く滞在する丸の内のことを指しています。元々金融、経済の中心と言

うステータスがあり、働く街としては1等ですが、人を惹きつける魅力は少ないエリアでした。昼夜及び、平日と休日の人口の差は激しく、就業時以外はゴーストタウン。さてその丸の内は魅力的な街創り及びブランディング化を計画しています。光のイベントとは二人三脚の関係で、それは大きく2つの構成となっています。一つは丸仲通りオリジナルのシャンパンゴールドのストリングスLEDを樹木に取り付けるイルミネーション街路で今や冬の定番となり、2017年は約2kmまで延長され今迄の中で一番長い光の街路でした。もうひとつは名称や開催場所が変化しながらテーマを持って実施されてきた光のイベントで1999年～2005年までは「東京ミレナリオ」、2006年～2011年までは「光都東京LIGHTPIA」、そして2012年からは「東京ミチテラス」が開催されてきました。

■「我が街」を魅力的な街に

2017年に駅前広場が完成した事で「行幸通り」は皇居から東京駅まで馬車が運行する唯一の道路となり、道路でありながら東京の象徴の一つである東京駅が一望できる美しい広場でもあります。そこで開催される「東京ミチテラス」は、昼と夜の景観は共に場のポテンシャルをさらにアップするスパイスになることが必要不可欠なミッションと考えました。それは、丸の内だけでなく、完成されている「場」で開催される光のイベントは、そうあるべきと私は考えます。



2017年の「東京ミチテラス」はフラワーアーティストのニコライ・バーグマン氏が総合演出となり、私は照明デザイナーとして協働し、光のイベントとして開催されました。夜の光のイベントとして宣伝はされてはいましたが、昼も美しくデザインされた花が、「我が街」の住人や来場者を楽しませ、美しい景観になるようにするという認識は二人とも全く一致していました。またそれは本来の「東京ミチテラス」の目的の一つでもあります。夜には光のイベントとして、昼間と違った表情で光と花が来場者を迎えます。光だけが際立つのではなく花と一緒に景色になり、また光は花の呼吸の様に演

出プログラムしました。配線は昼間の見え方を考慮して、できる限り自然に隠したり、ストリングスLEDを間接的に使用して効果的に光を潜ませたりしました。ここ数年は夜優先のイベント色が強く、場を見せるターゲットを夜の来場者に集約して、昼間の景観が犠牲になっていた様に思います。光のイベントは「我が街」のポテンシャルをあげるスパイスであり、イベントのために街があるわけではないと考えます。光のイベントとは言っても、夜景観だけでなく、その場の昼夜の魅力を活かして計画することが、「我が街」の魅力的なランドスケープに繋がると考えます。



主催：東京ミチテラス2017実行委員
撮影：(左) 富山和典 / (上2点) 山下裕子

2

あかりからの景観整備



角館 まさひで

東京都市大学客員教授/ぼんぼり光環境計画
/日本国際照明デザイナーズ協会会員

■原子砂漠に灯がともる

広島平和記念資料館での企画展として原爆体験者による原爆の絵を展示していた。黒や赤などの描写が多い中、最後にこの絵が一枚あった。夕暮れ焼け野原になってしまった広島市内にあかりが灯りだした。人々が生きていて、復興へ向けての現れだったのだろう。今私たちは日常の中で人工的な演出光に満たされ、あかりの持っている本質的な魅力を感じなくなってしまっているが、私はこの一枚の絵から、ほんの小さな一つのあかりが人々に感動を与える事のできることを痛感した。

行政による都市整備上(行政管理部)の照明環境は仕様設計によって計画が進められてきた。特に道路は路面の照度が重要な

判断基準となっている。この概念は道路空間のみを対象としているため、完成後は道路が目立つ夜景となってしまうのが現状である。



「原子砂漠に灯がともる」作者：田中儀作
情景日時：1945/09/10（広島平和記念資料館提供）

■官民共同のあかり景観

横浜元町仲通では照明社会実験を通して地域住民への啓発を行った。ここでは道路の路面照度は確保していない。街路の防犯性を高める照明環境として、周辺の暗闇を無くし、誘導効果を得る事が、通常の防犯照明と比較して飛躍的に、安心感が得られる事が証明された。結果、照明灯は多くなったが、総合的な省エネが実現でき、お店が目立つ事になり、ここ10年でお客さんが4倍となり店舗数が2倍となった。民側からのあかりが地域の防犯性を増し、あかり景観としても地域の特徴を可視化する事ができた。



横浜元町仲通：路面は暗いが問題なく歩行性能を確保し、お店が目立つ夜景となった。

越中八尾では防犯灯を街並みの建物側に向け、空間認知を促進し、歩行性能を確保し、通常の商店街と比較して≒1/80の省エネも実現した。大野村（現洋野町）では民間の敷地に公共照明を設置した。

※NPOゆめあかりくチームゆめあかり活動>大野村HP参照



越中八尾駅前通り整備：夜になると特徴的な街並みが目立つ景観が形成された。

■あかりからの景観整備

都市空間における照明設備は景観整備上、費用が低い割には効果が期待できる。民によるあかり景観への参加はまちづくりへの意識改善にもつながり、地域住民の街への積極的な参加が各地で促進されている。気仙沼市八日町では民参加による「あかり景観整備」に向けて、官民共同の新たな仕組み作りに取り組んでいる。予算上の行政の理論的な理解と地域住民の啓発がガキとなる。



気仙沼市八日町照明社会実験：民参加による防犯性を高める照明計画が進められている。

3 LEDが照明器具光源の主流になって

稲葉 裕

TDA正会員 / FORLIGHTS代表+照明プランナー
/ 日本国際照明デザイナーズ協会理事 / 照明学会会員

■行政がつくる大規模な夜間景観

『東京ミッドタウン日比谷』が3月29日に開業する。それに伴い千代田区道130号、131号、136号線、千代田区有地が一体的に整備された。1987年に日比谷シャンテが開業し、それに伴い、千代田区道131号、136号線が整備され、街路灯が新設された。

実はその街路灯、当時、私がデザインしたものである。その頃、住宅は白熱ランプ、オフィスは蛍光灯、街路灯は水銀ランプが主流であった。色温度や演色性など、街路灯で気に掛ける時代ではなかった。つまり、街路灯は街のオブジェ的な存在でしかなかった。そんな中、銀座通りで買い物客が美しく見えるようにと街路灯に演色性の高い光源を使用したのが話題になった。それから30年、街路灯の光源は水銀ランプ、メタルハライドランプ、そしてLEDランプへと変遷し、高演色となり色温度や配光の種類も増えた。街路灯の形はオブジェ的な造形は減り、街路を照らす照明効果の高いシンプルな形の街路灯が増えてきた。

昼の街の景観を魅せるのはペープメントであり、街路樹であり、賑やかな店先だ。昼間、街路灯は無用。夜間、照明は必要。しかしオブジェ的な街路灯は不要である。

『東京ミッドタウン日比谷』と一体的に整備されたランドスケープデザインのキーワードは『People in the Park』。都市施設

と公園と緑豊かな道路空間をメインに据え、街路灯の存在（形）は主張せず、夜間は木漏れ日を感じられるような照明（街路灯）とベンチ下に隠蔽された照明を景観に溶け込ませることにした。



【千代田区道136号線（工事中）：左_1987年の街路灯（消灯）、右_今回整備された形を主張しない街路灯】

■住民がつくる最小で最大の夜間景観

1月末に秋田・新屋駅前通りで『一軒一灯運動』の実証実験を秋田公立美術大学（主催）と行った。コアとなる施設は駅前の旧尾形食堂、空き家の展示スペース（NINO）、新屋ガラス工房である。それらのコア施設を繋ぐ新屋駅前通りに面した住宅の玄関灯などを点灯してもらい、道行く人々の安全や安心を確保しようという実験である。事前に点灯のお願いはしてあったものの思ったように新屋駅前通りの住宅の照明が点灯されなかった。理由は空き家や不在の家があり、点灯することが出来なかったようだ。我が家や私の事務所は職業上、あかりで近隣に貢献しようと玄関灯、パンチングメタルのファサード、植栽のライトアップは昼光センサーで暗くなったら点灯、明るくなったら消灯という制御スイッチにしている。そのようなスイッチを組み込めば点灯や消灯を忘れることはない。自宅の玄関灯は2009年10月にLEDランプに交換し8年以上使用しているが健在である。ちなみにその玄関灯の1年間の電気代は約350円というコーヒー一杯分ではない。

昨今のLEDランプの発達（長寿命・低電気代）、また安価になった自動点灯・消灯制御スイッチ。これらの技術革新と安全、安心、そして美しい夜間景観創造の為に私は『一軒一灯運動』を実践している。

最後になりますが、夜間景観は行政や他人に頼るのではなく、まず、自ら行動してください。暗くなってから、朝、明るくなるまで点灯しておくのはけっして電気の無駄ではありません。安全、安心、夜間景観に寄与しているのですから。皆さんで行動すれば、日本全国最小で最大の美しい夜間景観が実現します。この紙面を見て頂いた方の行動に期待します。

「北本市」その1

暮らしの場の習慣を観光に



埼玉県北本市は東京都心から電車で約45分の距離にあるベッドタウン。荒川沿いの農村集落として始まり、中山道と共に発展したまちは、昭和40年代に公団住宅の建設など、大規模な宅地開発が行われ、平成19年の人口約7万人をピークとして、現在では約6万7千人と人口減少が進んでいる。高齢化率も埼玉県平均よりも高い水準であり、今後も人口減少並びに高齢化率の上昇が続いていくことが予想されている。

上記のような課題を内包する郊外都市である北本市を舞台に、北本市観光協会では「暮らしと場の習慣を観光に」をテーマとして、観光によるまちづくりを行っている。

具体的な事業としては、2か月に1度「北本の観光のこと考えちゃわナイト」（通称かんちゃわナイト、平成24年より28回開催）という市民参加型WSを開催し、参加者と一緒に、北本の気になる、おもしろい、ここが好きなどを話し合い、集まった意見から何ができるのかを模索して、人に紹介したくなる様なまちの資源の掘り起こしを行い、実際に体験ツアーとしてイベントなどを開催している。

一例を紹介すると「荒川でモクズガニという大きなカニが獲れて、しかも食べられるらしい」という情報から、実際に「幻のモクズガニを探す旅」というツアーを開催したことがあ

る。「かんちゃわナイト」で参加者からカニの情報もたらされた時には、この郊外の普通のまちで、昔ならまだしも、現在でもカニが採れるとは誰も思っていなかった。しかし、調べてみると、カニを籠で毎年たくさん採っている蟹採り名人に出会えるなど、荒川周辺に昔から住んでいる人には、いわば常識（習慣）であり、筆者も実際にツアーで手のひらサイズほどの蟹を捕まえ、その後は参加者で蟹汁として美味しく頂いた。驚きと感動の観光体験は実には日常の中にあると、とても驚いたことを記憶している。

北本市観光協会の目指す『観光』とは、単に観光名所への誘客ではなく、北本にとって将来にわたり、持続可能で北本のまちづくりに参加するコミュニティの維持形成や、住人のシビックプライドを醸成するような体験創出を目的に、北本の日常の中にある多様性やおもしろさを、観光という手段で顕在化し、ツアーやイベントとしてパッケージすることである。そのために、体験ツアーやイベントなどを前提として、市民や参加者に能動的行動を促し、資源であるヒト・モノ・コトを、磨き光らせることを目指し、「暮らしと場の習慣研究所」等の活動や、北本の資源である雑木林を舞台としたイベント「北本春の森めぐり」を行っている。

景観ビジネス最前線

奥舟なごみ公園
しながわ花海道

屋外空間に彩を。

OUTDOOR + design

SD Lightingは屋外を専門とした照明メーカーです。
屋外で必要とされる照明インフラ、ポールから灯具まで幅広く製造・販売しています。
私たちは 風景を魅力的にするためのお手伝いが可能です。

SD Lighting株式会社
URL : www.sd-lighting.co.jp

SDLighting

OUTDOOR + design

POLE Luminaire シリーズ

ホワイトボード

冬の季節はどうしても街のイルミネーションがにぎやかになる。でも最近はどここの街も、安易に光の景観を作り出す。幸いそのプロがTDAにいることもあり、今回の企画になった。ただ光らせれば、ただにぎやかにすればいい訳でない事が分かる紙面に

なった。NEWSでは景観アドバイザー養成講座の活動がTDAから始ろうとしている事をお伝えできた。TDAの原点もここにあり、今後はさらにこの活動に力を入れていきたいと考えており、「景観文化」の紙面でも多角的にお伝えしていきたい。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
 (株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / (株)都市環境研究所

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
 Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-jr.jp
<http://www.tda-jr.jp> <https://www.facebook.com/tda.public>

【編集：(株)アーバンプランニングネットワーク】2018031500